

「胃と腸ハンドブック」

「胃と腸」編集委員会 編集

京都第一赤十字病院第二内科部長 多田正大
 癌研究会附属病院検診センター所長、内科副部長 丸山雅一 責任編集
 山梨医科大学教授・内科 藤野雅之

日本消化器内視鏡学会理事長・筑波大学名誉教授

崎 田 隆 夫

本書をひもといて先ず感じたことはタイトルのことである。『胃と腸ハンドブック』という書名。本書は判型も大きいA4判で564頁に及ぶ大作であり、“ハンドブック”というより成書といってよい。外国にはままこのような大冊を“ハンドブック”と冠した例がある由であるが、恐らく本邦では最初のことであろう。近年の医学の進歩は誠に早く大きく、その意味で今後は“ハンドブック”も薄い小冊子というわけにはいなくなることを本書のタイトルは示唆しているのかもしれない。

ともあれ、主として診断学を中心としつつも、一部治療にも及んだ消化器病学のup-to-dateな現状を紹介し、長年の『胃と腸』誌の蓄積の上に立って執筆・編集されたこのような大作が、このたび世に出たことについて、私はまず敬意の念を表するとともに、衷心より祝詞を捧げたい。

ほぼ30年も前のことであるが、昭和37年の春、初代の内視鏡学会理事長を務められた故田坂定孝先生（私の恩師であった）が村上忠重先生を長とする検討委員会のもとに、内視鏡学会会長講演として「早期胃癌全国集計」を発表され、この領域に大きな進歩をもたらしたことを覚えておられる方も少なくないことと思う。そしてこの少し前（関係者のお話によると昭和35年秋）より活動を開始していた、同じく村上先生を長とする初期胃癌研究グループに上記の検討委員会も合流し、昭和39年

には現在のように早期胃癌研究会と改称するに至ったのである。

本書の“母体”である『胃と腸』はその早期胃癌研究会の機関誌として昭和41年4月に誕生したものである。以来同誌は28年の長い歴史を有するに至り、多数の研究者の参加を得、村上忠重先生より現在は白壁彦夫先生の指導のもと名実ともに消化器病学をリードする雑誌に発展している。

この長年の歴史を踏まえて、現編集委員の各位が、本誌に掲載された長年の膨大な論文を上手にまとめられ、新たに書き下ろされ、補足を加えられたのが本書であり、まさに現代の消化器病学を学ぶうえで恰好の書といえるものである。

内容は20部より成っている。第1章「序説」は消化管X線・内視鏡の歴史（25年間の歩み）と消化管疾患の肉眼病理の2部、第II章「検査法」は食道、胃・十二指腸、小腸・大腸、胆・膵の4部、第III章「内視鏡治療」は食道静脈瘤硬化療法、消化管出血止血術、内視鏡的粘膜切除術、レーザー治療、狭窄に対する拡張術、内視鏡的乳頭切除術の6部、第IV章「鑑別診断と典型症例」は食道病変の鑑別診断と典型症例、胃・十二指腸病変の鑑別診断と典型症例、小腸・大腸病変の鑑別診断と典型症例、乳頭部および胆・膵病変の鑑別診断と典型症例の8部、合計20部である。

初めに述べたように、本書は持ち歩くには重くて適さず、座右に置いて常にひもとく書として、広く消化

器病学を志す方々にお薦めしたい。編集に携わったお一人にお聞きしたところによると、本の価格をかなり下げて購入しやすいものにしたということも、“ハンドブック”という名前が生まれた由であり、お若い方にも手の届くものとなるよう配慮されているようである。

ともあれ、本書は消化器病学をこれから志す若い読者だけではなく、この道の専門書としても十分通用し、up-to-dateの成書として高く評価されると考える。

最後になって私の立場より若干注文を述べさせていただきたい。本書は以上述べた諸点から今後改訂が重ねられ、より充実した内容のものになっていくことは必定であろうが、本書には、日本の消化器病学を大きく飛躍させる端緒にもなり、胃癌早期診断学で重要な役割を果たした胃カメラの功績がほとんど触れられていないのが残念である。また、内視鏡学会用語委員会の用語集を踏まえて各論文が記述されているが、今後用語委員会の改訂もあろうから、今後ともそれを生かしていただきたい。更には、索引欄は読者の立場に立って可及的詳細にしていいただければと思う。これらの諸点は改訂の際には編集者の方々が考慮に入れられることと思う。

いずれにしても消化器病学に携わる人にとって必携の良書であることを記して書評としたい。

●A4変型 頁564 図178 写真574
 原色図767 1992 定価17,510
 (税込) ¥400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)